

加藤辨三郎 述

浄土和讃

12

文責 本誌編集部



柱の釘

前々月と前月にわたってもうしあげたのは十二光のうち
の無対光のところでした。それは

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆへなれば

一切の業繋ものぞこりぬ

畢竟依を帰命せよ

というご和讃です。このなかの「一切の業繋ものぞこりぬ」とは、心の底から念佛を称えれば、過去・現在・未来のすべての業繋を除かれると説かれているのです。

この過去・現在・未来につながるころの業繋は、わたしどもがつくるところのものでしょう。過去・現在・未来の業繋について、かつて松原致遠先生から伺がって、非常に印象深く、それがわたしに強く教えてくれたものがあるのです。この説話は、金子大榮先生もおおせになつていられました。

無始以来の業

ある家庭に悪いことばかりする男の子がいました。お母さんが、何とかしてこの子の悪いくせを直してやりたいと考えたのです。その考えられたことは、一つ悪いことをすると、お部屋の柱に釘を一本打つ。また悪いことをすると、また釘を打つ。だんだんやって、柱に釘がいっぱいになってしまった。それでその子は気がつき、「お母さん、何でそんなに釘を打つの」と聞く。お母さんは、「いやお前が悪いことをする。そこで、そのたびに釘を打つた。ところがいくら打つても、お前は聞かない。それでこんなにいっぱいになった」。それを聞いた子供は、すぐ悟って「ああ、お母さん、悪かった。もう悪いことはやめます。」といい、こんどはいいことをするようになりました。お母さんは喜んで、いいことをするたびに、一本ずつ釘を抜いていったのです。幸いにも全部釘が抜かれました。それを見た子供がさめざめと泣いた。「なぜ泣くの、お前が、いいことをしたから釘がみんな抜けた。たいへん結構ではないか。お母さんはうれししいよ」「いや、だってその釘の跡があるではないか」と釘の跡を見て泣いたので。この話は、よく使われる説話でしょうが、わたしどもの善悪の業は、なかなか消えてなくなるらないものです。

そもそも時間そのものが、現在だけにあるわけではありません。過去から、現在から、未来から、ずっとつながっているのです。ゆえに業といっても、現在だけの業ではありません。ずっと過去からの業です。これはみなさんもそう感じられるとおもいますが、親鸞聖人は、それを非常に深く感じていられたのでしょうか。無始この方の業だとおっしゃっています。

どが初めとはいえない。どが終りともいえない。ずっと引いていく。ゆえに、過去、現在、未来を貫いて業を感じになつていくのです。それが、過去も現在も未来も、一緒にふつと清められていく、あるいは除かれていくというのは、ただ念佛あるのみです。念佛で、はじめて過去の業からも懺悔させられるのです。懺悔させられるというのが、清められることです。

だからわたしどもは、無始以来、もろもろの悪業を重ねてきています。いま現に、自分の生存している期間に、ろくなことをしていません。悪いことばかりしていたという意識は、濃厚にあるわけで、しかもそれは今に始まったこ

とでありません。それでこれはまた未来にもつながっているのだと痛感いたします。

それが念佛によって清められていく、除かれていく。

そこに念佛が教えであり、道であるわけです。

これは信ずる人であれば、おのずから感ぜられるのです。親鸞聖人は、それをお感じになったから「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、おっしゃっていられます。

そこが業繫を除かれたところなのです。ですから、親鸞聖人のあの『歎異抄』の終わりに、このご和讃の境地を、血の出るような生き生きとした表白で説いてくださっているのです。

光の炎

それでは、第六偈に移っていきたいとおもいます。

佛光照耀最第一

光炎王佛となづけたり

三塗の黒闇ひらくなり

大応供を帰命せよ

これもほとんど曇鸞大師のお言葉どおりです。曇鸞大師の偈は、

佛光照耀最第一 (佛光照耀して最第一なり)

故佛又号光炎王 (故に佛を又光炎王と号す)

三塗黒闇蒙光啓 (三塗の黒闇光啓を蒙る)

是故頂礼大応供 (是の故に大応供を頂礼したてまつる)

であります。

これも、言葉そっくりではないが、その意味のそっくりのことが、『大無量寿経』に説かれています。要するに、阿弥陀の光は、光のなかのまたその光とっていいのです。光炎とは、光の炎といっています。なぜ、そういう強さをここで説くかは、他ならぬ「三塗の黒闇ひらくなり」です。つまり三塗とは、地獄・餓鬼・畜生です。塗とは道です。ゆえに地獄道・餓鬼道・畜生道です。

これは、『往生要集』に説かれていて、非常に深い思想、非常に深い教えです。だが、それよりもわたしどもは、わたしども自身の心のなかといったように受け取った方が、一番身に即した感じをわたしは持つわけです。実際に自分

金子大榮選集		
人・佛	¥2500	〒310
歎異抄領解・歎異抄聞思録(上)	¥2500	〒310
歎異抄聞思録(下)	¥2060	〒260
大無量寿経講話(上)	¥2500	〒310
大無量寿経講話(下)	¥2060	〒310
観無量寿経講話	¥2060	〒260
阿弥陀経講話・正信偈講話	¥2060	〒260
金子大榮著		
聞思室日記	¥1648	〒260
聞思室日記 続	¥1648	〒260
聞思室日記 続々	¥1648	〒260
光輪鈔	¥721	〒175
佛教の人間観	¥1030	〒210
念佛と人生	¥1030	〒210
人生を語る	¥1030	〒210
如来の本願と人間の理想	¥1030	〒210
凡夫のさとり	¥2060	〒260
雑想観 原稿(写真版)	¥3090	〒260
ありがたさについて	¥2060	〒260
長田恒雄著		
現代語訳・歎異抄	¥927	〒210
岸上たえ歌集		
白い道	¥1854	〒260
加藤辨三郎編		
念佛のおすすめ(阿弥陀経)	¥412	〒175
加藤辨三郎著		
教行信証のことは	¥2060	〒260
一字の力	¥721	〒210
日日あらたに	¥721	〒210
佛教と私	¥927	〒210
佛教と実業	¥927	〒210
そらごとたわごと	¥927	〒210
随縁自在	¥927	〒210
随縁自在 続	¥618	〒210
随縁自在 続々	¥927	〒210
いのち尊し	¥927	〒210
いのち尊し 続	¥1030	〒210
いのち尊し 続々	¥361	〒210
いのち尊し 続々々	¥927	〒210
在家佛教編集部編		
ブツダの道	¥3090	〒310
友田俊治著		
大阪のなかの寺	¥1200	〒260

— 注文は本協会または書店へ —

無限の感謝

の心のなかを見ると、地獄・餓鬼・畜生の三悪道で固まっています。それは、前月述べました煩惱でいえば、貪欲・瞋恚・愚痴です。ほんとうに、わたしの心のなかを内省すると、貪欲さかりであるとおもわざるを得ないのです。何と自分を弁護しようとも、汚い心がどろどろしていて、燃えさかるものを感じます。それはやはり地獄の相だとおもいます。

この地獄・餓鬼・畜生の三悪道で固まっているものを、光炎、光の炎という強い光で開いてくださる、あるいはそこから出してくださる、こういうのが光炎王佛です。

普通われわれは、よく地獄のかまの下までもというが、その地獄の火の真つただなか、そういうところも照らします。照らして、そこから引つ張り出してくださるのです。そこから救ってくださるのです。そういう力があります。ゆえにこそ、その光は光炎王佛です。

餓鬼道は、欲望限らない世界でしょう。あれも欲しい、これも欲しいというのが餓鬼なのです。幾らやってもまだ欲しい、まだ欲しいという。そういうと何かいかにも人ごとみたいにおもいますが、それは自分の心のなかにあるのです。これでもういい、満足しましたということは、決してありません。口ではそういつても、実際にはそうではないのです。これがわれわれの心のなかに巣食うているこ

ろの餓鬼の相なのです。

それから畜生は、お互いに害し合う、足を引っ張り合う世界です。愚痴もそれです。やきもちも、そねみも、一種の畜生に近い心境で憎み合う世界です。憎み合うほどに感じなくても、そういう世界があります。

わたしなど、残念だけれど佛さまのような心だとは、いうことも感ずることもできません。やはり汚い人間であり、地獄・餓鬼・畜生を内に抱いていると感じざるを得ないわけです。

そこへ届いてくださる光、これが阿弥陀佛の光であって、光炎王佛と名づける。これ以上強い光はない。最も強い光を放っている、それが照耀第一である。こういうことで、阿弥陀佛の光の強さを礼讃しておいになるわけです。凡夫が凡夫のままて救われる道は、これしかないとの仰せです。どんな悪の真つただなかへも、光炎王佛は入ってくださって、それを清め、温めて、救ってくださるのです。

そういうみ佛だから、これを「大応供」と名づける。大応供も阿弥陀佛の別号なのです。つまり、小乗佛教では、声聞・縁覚・菩薩の三乗があつて、十分な修行が尽くされて卒業されると阿羅漢になる。その羅漢さまを応供といっ

ていたのです。そこに至って、はじめて人びとから供養を受ける資格があるのです。みなさんからご供養をいただきたい、それによって生活を支える資格がでてくるのが応供です。大の字をつけたのは、浄土門になってからです。

ですから、ここでは阿弥陀さまの別号が大応供で、一切衆生からご供養を受けられるのです。ご供養は、地獄から救い出されたわれわれが佛恩感謝の気持ちで捧げるわけです。ご供養は、ご飯やお茶を差しあげるだけではありません。無限の感謝とでももうしましうか、感謝を捧げる、ありがたいな、おかげさまという供養です。わたしもが、おかげさまでといっている、そのお相手が阿弥陀佛でございます。すべて阿弥陀佛のおかげさまです。

三塗の黒闇を、自分が身をもって感じ、地獄・餓鬼・畜生の暗やみのなかにいるのだ、それが自分の心なのだ、自分の心の奥はかたくなな真つ暗やみです。しかし、そこへ光を差し込んでくださる。その光は阿弥陀如来の光のみだ、このようにわたしにはおもえます。裏からいえば、凡夫なればこそであり、罪悪深重の意識が、深ければ深いほど、光炎王佛の光の強さを感じないではいられません。

(在家佛教協会前理事長・協和醗酵工業元社長)